ひょうご人権ジャーナル

ひろげよう こころのネットワーク

きずな

2012年
（平成24年）
9

9月8日　国際識字デー

個人とコミュニティー、社会にとっての識字の重要性を強調することを目的に、1990（平成2）年にユネスコが制定。現在、世界には戦争や貧困等によって読み書きのできない人が7億人以上いるといわれています。

特集テーマ　高齢者

ささえあい、つながりあい

2 ユニークな誌面展開で
地域での高齢者の見守りを啓発
社会福祉法人神戸市東灘区社会福祉協議会

3 急増するひとり暮らし高齢者の
社会参加への新たな支援策
－居場所づくりとICT（情報通信技術）活用－
安達正嗣さん（高崎健康福祉大学健康福祉学部教授）

4 高齢者が日常で困っていることを支援
社会福祉法人千鳥会ゴールド（淡路市）

5 高齢者虐待の防止に向けて
臼井キミカさん
（甲南女子大学看護リハビリテーション学部教授）

6 男性介護者たちの安らぎの空間
ＮＰＯ法人介護コミュニティー咲咲館（西宮市）

7 この人に聞く！
丹羽真理さん
（介護カウンセラー、「サロン・ド・介護」主宰）

8 情報ぷらざ

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会

特集

高齢者

高齢化の進展に伴い、高齢者等の社会的孤立の問題が大きくクローズアップされ、また、高齢者虐待や高齢者を狙った犯罪など、人権に関わる問題が増えています。今月は世代を超えて人々が高齢者の人権を尊重し、支え合い、つながり合える関係づくりについて考えます。

近ごろの話題

ユニークな誌面展開で地域での高齢者の見守りを啓発

社会福祉法人神戸市東灘区社会福祉協議会

多世代を結び付ける構成

神戸市東灘区社会福祉協議会では今年1月、地域ぐるみで高齢者の見守りについて考えるヒントにしてもらおうと、雑誌「ｏｍｕｓｕｂｉ（おむすび）」を創刊しました。

「世代間をつなげ、結び合う」という意味が込められたタイトル通り、子育て世代とシニア世代の両方に興味を持ってもらえるように誌面展開を工夫しています。シニア世代は表紙から、子育て世代は裏表紙からページをめくり、最初はそれぞれ同世代の活動から始まって、読み進めていくと世代を超えた見守り活動の話題にたどり着くという仕掛けになっています。

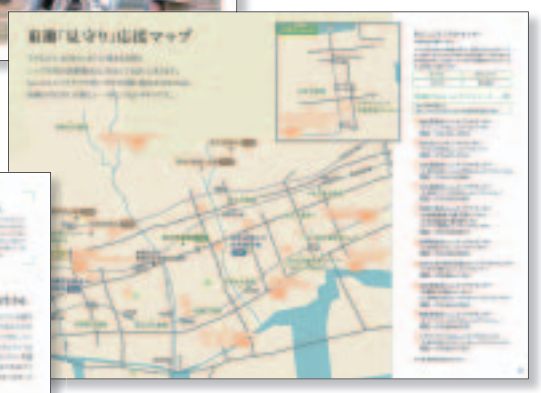
「身近な気付き＝見守り」に

制作に携わった同協議会の鎌田あかねさんは「ｏｍｕｓｕｂｉが、子どもから子育て世代のお母さん、お父さん、高齢者までが気軽に触れ合えるきっかけをつくり、将来は声かけなど地域の身近な気付きが、高齢者の見守りにつながるようになれば」と話します。

創刊以来、区民の反響は大きく、取材の依頼、制作の手伝いを申し出る読者もいるそうです。ｏｍｕｓｕｂｉは平成23（２０１１）年度の神戸市高齢者見守り推進事業のモデル事業としてスタートし、今年度は企画段階から区民の参加を募る予定です。東灘区内のあんしんすこやかセンターや児童館など約１００カ所で配布しています。

【表／シニア世代向け表紙】

【裏／子育て世代向け表紙】



雑誌の中ほどにはシニア世代と子育て世代の交流に関する情報や区内の見守りマップなどを掲載しています

「omusubi」についての問い合わせ
神戸市東灘区社会福祉協議会
TEL 078（841）4131

メッセージ

急増するひとり暮らし高齢者の社会参加への新たな支援策

-居場所づくりとICT（情報通信技術）活用-

安達（あだち） 正嗣（まさし） さん（高崎健康福祉大学健康福祉学部教授）

近年、社会の急激な変化に伴って、高齢者の暮らし方も大きく変わってきました。ここでは、特にひとりで暮らす高齢者に焦点を当てて、その社会参加に対する新たな支援についてみてみます。

ひとり暮らし高齢者世帯の急増傾向

65歳以上の高齢者世帯の変化で最も特徴的な点は、ひとり暮らしの急増です。厚生労働省「国民生活基礎調査」（2011年）によれば、1989（平成元）年と2010（平成22）年の高齢者世帯を比べると、三世代同居は40・7%から16・2%へと大幅に減っているのに対して、ひとり暮らしは14・8%から24・2%へと大きく増えています。

高齢期における家族の変化

従来は、子が結婚などで独立することで夫婦のみの暮らしとなり、夫婦のどちらかが亡くなることによって、子と途中同居しなければ、ひとり暮らしになるといったコースをたどる人々が大部分と考えられてきました。しかし、そこにさらに、自分の家族をつくらない生涯未婚者、あるいは離別者が高齢期に達して、そのままひとり暮らしに至るといったケースが大幅に加わることを十分に想定して福祉政策を進めていく必要が生じたわけです。

新しい地域福祉としての「居場所づくり」

地域福祉の新たな展開として、急増するひとり暮らし高齢者が孤立せずに地域参加できるような「居場所づくり」を支援する取り組みが現れました。内閣府「平成21年度・高齢社会白書」では、ニュータウンの団地内の「毎日オープンのカフェタイプ」「市の遊休施設を活用した場所提供タイプ」、福祉施設内の「地域住民と行政、福祉施設が連携して運営するタイプ」といった実例が紹介されています。各地域の実情に合った多様な「居場所づくり」が、重要な支援策として全国に広がりつつあります。

ICTによる高齢者の社会参加の試み

また最近、ひとり暮らし高齢者への新しい孤立防止策として、ICT（情報通信技術）の活用が注目されています。一般社団法人・シニア社会学会「ICTによる高齢者孤立防止モデル普及事業報告書」（2012年4月）によれば、高齢者に使いやすいタッチパネル式のパソコンを配布することによって、手書きメール交換やテレビ電話、安否確認、日記や絵日記などの手書きメモの保存、自治体ニュースなどの情報送信といったサービス提供が、すでに実験的な試みとして、東京都江戸川区や北海道北見市などで行われています。

主体的な社会参加を促進するための支援へ

今後は「居場所づくり」やICT活用などを通じて、ひとり暮らし高齢者自身による主体的な地域参加、そして広く社会参加を促進するための支援策が求められてくると言えるでしょう。

プロフィール
1957（昭和32）年、兵庫県生まれ。博士（社会学・甲南大学）。兵庫県家庭問題研究所、関西女学院短期大学、名古屋市立大学、千里金蘭大学を経て、2012（平成24）年4月から現職。著書に「高齢期家族の社会学」（世界思想社）など。

取材ノートから

高齢者が日常で困っていることを支援

社会福祉法人千鳥会ゴールド（淡路市）

高齢者の日常生活を側面から支える生活援助員（ＬＳＡ＝ライフ・サポート・アドバイザー）という仕事をご存じですか。ＬＳＡは※シルバーハウジングや高齢者向け優良賃貸住宅、登録住宅等に居住している高齢者に対し、必要に応じて生活指導や安否確認、緊急時における連絡などのサービスを行っています。

「千鳥会ゴールド」は市の委託を受け、市内の高齢者住宅約80軒に２人のＬＳＡを派遣しています。その一人、佐名川洋子さんはＬＳＡになって５年目。母親の介護をしていた経験から、高齢者への支援の大切さを痛感したのがきっかけといいます。

転倒している人を発見したことも

淡路市では、高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らせるようＬＳＡの派遣事業に取り組んでいます。特別養護老人ホームなどを運営する

「お変わりありませんか」と気さくに声を掛けるLSA。日々のコミュニケーションの積み重ねが信頼関係につながっていきます

「高齢者宅を訪ねた時、家の中で転倒していたのを発見したこともありました。ＬＳＡは気付かれにくい、家でのアクシデントにも対応します」と語ります。

いざという時の柔軟な支援体制を

訪問時には世間話をしながら、体調や食生活などを尋ねます。「高齢者と話をしていると寂しい気持ちが伝わり、何を求めているかが分かるときがあります」と佐名川さん。高齢者は他愛のない会話を楽しみにしているとはいえ、ＬＳＡには高齢者と一定の距離感を保つことが求められます。「気安く話せるようになり、慣れ過ぎてしまうと不必要な支援をしてしまうことにつながりかねないので注意が必要です」とは言うものの、日頃の活動で一番の課題なのが、緊急時の対応です。高齢者住宅には各戸に緊急通報装置が設置されていますが、いざという時にうまく使えるかどうかは分かりません。

「緊急時に家の鍵を開けることについても、規則上の問題からご家族や関係機関への連絡に手間取ることがあります。より迅速な対応ができるよう、そのあたりの連携をもっと強化しなければならないと思います」

超高齢社会を迎え、地域ぐるみで高齢者を見守る体制の充実がますます求められます。今後も、その一翼を担うＬＳＡが果たす役割はより大きくなっていくでしょう。

※シルバーハウジング…バリアフリーに対応した公共賃貸住宅に、高齢者を対象とした安否の確認や緊急時対応などのサービスを行うＬＳＡを配置した「高齢者世話付き住宅」のこと

「一軒、一軒を回って元気な反応があるのがうれしいです」と千鳥会ゴールドのLSA、佐名川さん

取材ノートから

高齢者虐待の防止に向けて

甲南女子大学看護リハビリテーション学部教授 臼井（うすい）キミカさん

一人ひとりの人生を尊重する

高齢者虐待を防止するには、当事者や介護者の孤立化が叫ばれる中、地域がどのように関われるかを考える必要があります。

甲南女子大学教授の臼井キミカさんは高齢者虐待について、その原因と防止策をさまざまな観点から研究しています。「虐待を受ける高齢者に認知症の方が多いのは、周囲と意志の表現や伝達などがうまくいかず、手が掛かると思われがちだからです。ここで重要なのは、認知症だからとひとくくりに捉えず、一人ひとりのこれまでの人生や価値観を知り、皆でそれを大切にする気持ち、個人を尊重する姿勢を持ち、その人に合ったケアや環境を整えることです。そうすることで、高齢者も安心し、介護する側にも余裕が生まれると思います」と語ります。

臼井さんは今年7月に開かれた「第9回日本高齢者虐待防止学会神戸大会」で大会長を務めました。同学会は「共に支え合う虐待防止の地域づくり」をテーマに、専門家がさまざまな視点から虐待防止策を検討するものです。

「学会は、各地から寄せられた実践例や高齢者の人権擁護、虐待防止に向けたネットワークの構築、セルフネグレクト（「私は一人で大丈夫」と支援を拒まれること）の問題など、虐待や認知症についての情報を共有、発信できる機会になりました。東日本大震災の被災地でも高齢者などの社会的弱者が抱える問題が懸念されていますが、そういう意味でも阪神・淡路大震災を経験した地での開催は意義深いものになったと思います。一口に、地域の関わりと言っても、そのかたちはさまざまで、最近は以前からある家族の会のほかに男性介護者の会なども増え、それぞれにネットワークが育まれています。身近で悩みや苦労を聞いてくれる人たちが果たす役割は大きいです」と話します。

高齢者に対する正しい理解を

臼井さんは、高齢者虐待の潜在的要因としてエイジズム※があると考え、看護師、保健師を目指す学生の卒業論文のテーマに高齢者を正しく理解するための試みを取り上げています。2011（平成23）年度は高齢者から生い立ちや人生の経験などを聞き取り、それを基に紙芝居を作って上演しました。

「学生たちは紙芝居の制作を通して、高齢者が歩んでこられた道のりや、経験の尊さを知ります」。学生たちからは「認知症の人に対するイメージが変わった」「目が覚める発見があった」などといった声が挙がっています。

核家族化が進み、世代を超えた触れ合いの機会が少なくなった今、臼井さんはあらゆる手段を考え、高齢者の尊厳を守り、虐待の防止に取り組んでいます。

※エイジズム…年齢を理由に個人や集団を不利に扱ったり差別すること。特に高齢者に対して向けられる場合が多いといわれている

7月の学会には一般の参加者も多く、高齢者虐待に対する関心の高さを印象付けました

取材ノートから

注目を集める介護者向けサロン

介護が必要な高齢者が増えるにつれて、介護者の高齢化や孤立化が深刻になっています。
近年、県内各地に、介護者たちが集い、気軽に悩みを語り合えるサロンが誕生しています。

男性介護者たちの安らぎの空間

NPO法人介護コミュニティー咲咲館（西宮市）

西宮市にある「介護コミュニティー咲咲館」は男性介護者が集い、食事やお茶を楽しみながら悩みを語り合ったり、介護経験者から助言を受けたりすることで、介護者がほっと安らげるひとときを提供しています。

オープンは2011（平成23）年8月。理事長の山田公平さんが2年半にわたって実父の介護を経験したことがきっかけでした。「私はホームヘルパーの資格を持ち、訪問介護所を運営していますが、仕事で関わる福祉と自分の親の介護は気持ちの上で全く異なります。父親の一人で何もできない姿にいらだち、つい声を荒げてしまうこともありました。あの時、私は男性介護者が陥りやすい典型的な悪循環の中に入り込んでいました」と振り返ります。

自宅で介護をしていると外の世界との接点が少なくなり、そこから孤立感や閉そく感が生まれ、虐待につながりやすくなります。母親の介護のために会社を辞め、咲咲館の利用者からスタッフになった林秀行さんは、「介護者の交流会はよく開かれていますが、男性の介護者の場合、それまで隣近所の付き合いが希薄だった分、家にこもりがちになるし、人に頼れないとか弱音を吐けないとかといったプライドも邪魔します。もっと気軽に情報交換をしたり、やり場のない気持ちを吐き出したりして、気分転換を図ることが必要です」と話します。

もう一人のスタッフ、井上貞一郎さんも介護経験者。井上さんはインターネットのユーストリームでのジャズライブの動画を配信しています。「介護が一段落し、夜に聴くジャズがストレス発散でした。そんな経験から同じ悩みを抱えている人に何かしてあげたくて」

咲咲館では高齢者虐待の防止や認知症を描いた紙芝居を制作し、市民講座などで公演。介護者としての経験を地域の人たちに分かりやすく伝えています。

「いろいろな方法で虐待や介護に関わる問題の解決につなげていきたいです。介護者にはぜひ咲咲館を利用してほしいですね」と山田さんは力を込めます。

「紙芝居はスタッフの介護体験をベースに作りました」と山田さん

NPO法人介護コミュニティー咲咲館
西宮市戸田町2-2 ルモン西宮605
TEL 0798(39)8218
ホームページで活動を紹介しています
咲咲館　検索

きずなライブラリー ～おすすめの一冊～

100歳からの幸福論
～伝説の灘校教師が語る奇跡の人生哲学～
橋本武著（牧野出版）

元灘高校の国語教師で、小説「銀の匙」を3年かけて読み解くという授業で有名になった著者は、今年で満100歳。これまでの人生を〝成り行き任せ〟というも、決して消極的、場当たり的でなく、86歳から「源氏物語」の現代語訳を手掛けるなど、何事にも前向きに挑戦してきました。

「人が生きていくうえで、余計な出会いなど何ひとつない」「人生において一番幸せなこと、それは、いつまでも夢を見続けられること」といった各章のタイトルや、巻末の「自分史いろはカルタ」に収録された句などは、どれも平易な言葉ながら、読者の心に響くのは著書が積み重ねてきた人生の重みなのかもしれません。

この人に聞く！

介護カウンセラー「サロン・ド・介護」主宰 丹羽（にわ）真理（まり）さん

家族の誰かが介護が必要になれば、できる限りのことをしてあげたいと思うもの。しかし、頑張り過ぎてしまうと身も心も疲れてしまいます。介護カウンセラーの丹羽真理さんは講演などの活動の傍ら、両親を介護した経験を生かし、介護を離れて気楽に語り合え、リフレッシュできる「サロン・ド・介護」を神戸市垂水区で開いています。

家族会のメンバーたちと。右端が丹羽さん

Q「サロン・ド・介護」を始めたきっかけは。

A 私は大学時代から20年以上にわたって両親の介護をしてきました。ずっと介護を続けていると、例えば、仕事をしながら介護をするにはどうすればいいか、介護保険制度を効果的に利用するにはどうすればいいかなどといろいろ考えます。そんな経験を介護者支援に生かしたいと思ったからです。

Q サロンの利用者や相談者と触れ合う中で伝えたいことは。

A 介護を始めると多くの人がパニックに陥ります。介護についての正しい情報を得て、周囲に手伝ってもらえるかどうかを相談するなど、一人で抱え込まないことがポイントです。介護者は苦しい時、しんどい時には周囲に気を遣わず声を上げることが大切です。

Q 丹羽さんはサロンの運営のほか、介護者たちの家族会の活動にも関わっていますね。

A 私がファシリテーターとして参加している家族会では、参加者同士の経験や感情を共有することを活動の柱にしており、専門家から助言を頂く機会も設けています。

Q 誰にだって親の介護をしなければならない場合がありますが、実際にその時を迎えるに当たっての心構えなどは。

A 仕事をしている人から「突然、親の介護をしなければならなくなったが、どうしていいのか分からない」とよく相談を受けます。将来のために今のうちから介護保険制度について学んだり、仕事と生活、介護のバランスの取り方などを考えたりするのもいいでしょう。また、それは個人だけの問題ではなく、企業もワーク・ライフ・バランスの視点から介護休暇などの支援策を講じる必要があります。

「サロン・ド・介護」についての問い合わせ ✉ lets_care_family@yahoo.co.jp

試写室 人生、いろどり（2012年）

四国で一番人口が少ないまち、徳島県上勝町。典型的な過疎地が山で採れる葉っぱを料理の「つまもの」として販売したところ反響を呼び、まちおこしに成功したという実話の映画化です。

葉っぱビジネスを思いついた農協の若手職員の江田は説明会を開きますが、賛同したのは雑貨店を営む花恵と彼女に口説かれた薫のみ。花恵と薫は一時帰郷していた同級生の路子を誘い、江田と共に料亭でどんな葉っぱが必要なのかを教わります。

主人公の３人の女性はそれぞれに問題を抱えています。花恵は都会に住む息子からの老人ホームへの入所の提案に反発し、薫は何でも仕切りたがる夫の横暴に耐えています。そして路子は教師をしていると嘘をついています。

やがて葉っぱが売れ始め、彼女たちの人生にも変化が…。元気な高齢者たちが新しいことに挑戦していく姿、そのフットワークの軽さには大いに励まされます。９月22日（土・祝）からシネ・リーブル神戸で公開されます。

監督：御法川修　出演：吉行和子、富司純子、中尾ミエ、藤竜也ほか
問い合わせ▶シネ・リーブル神戸 TEL 078(334)2126

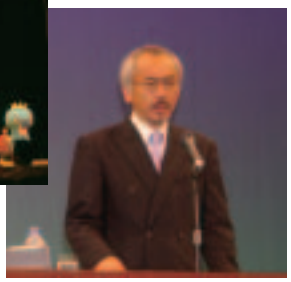
情報ぷらざ

「ひょうご・ヒューマンフェスティバル2012 in にしのみや」を盛大に開催

8月11日、「人権文化をすすめる県民運動」の推進強調月間（8月）の主要行事である「ひょうご・ヒューマンフェスティバル2012 in にしのみや」を西宮市民会館・アミティホールで開催しました。

西宮市立西宮浜中学校ジャズバンド部のウェルカム演奏の後、ひょうご人権大使、伊東浩司さんによる開会宣言で幕を開けました。人権講演会には〝夜回り先生〟でおなじみの花園大学客員教授、水谷修さんが登壇。多くの若者たちとの触れ合いを通して非行防止と更生に取り組んできた経験から、子どもたちが抱えているいじめなどの問題の解決に向けて、大人たちがしなければならないことなどを話しました。

午後のステージでは、大学生のアカペラグループに続いて、東北の被災地で支援活動をしている歌手の川嶋あいさんのトーク&ライブで盛り上がりました。その他にも、人形芝居えびす座の「えびす舞」、韓国伝統芸能、マンドリン演奏、男声合唱団による合唱、子ども多文化共生教育フォーラムなどバラエティーに富んだプログラムで、会場は大人も子どももたくさんの笑顔に包まれました。



兵庫県人権啓発協会理事長である金澤和夫副知事（右から2人目）の人権メッセージで幕開け〈上〉。水谷さんの講演には多くの人が詰め掛けました〈右〉

イベントガイド

稲美町人権啓発講座「ほっとホットセミナー」	●**日時**／9月8日(土)10:00～11:30　※申し込み不要、無料 ●**場所**／いきがい創造センター　※JR「土山」駅から神姫バス「稲美町役場前」下車、徒歩約5分 ●**内容**／講演会「人権の視点から見た男女共同参画社会」吉田忠義さん(兵庫県人権啓発協会講師) ●**問い合わせ**／稲美町教育委員会人権教育課　TEL079(492)1212
兵庫県自殺予防週間事業講演会	●**日時**／9月29日(土)13:00～16:00　※要申し込み、無料 ●**場所**／兵庫県農業会館　※JR・阪神「元町」駅から徒歩約10分、市営地下鉄「旧居留地・大丸前」駅から徒歩約5分 ●**内容**／講演会「こころ、元気ですか？～思春期・青年期・女性のうつについて考えよう～」生野照子さん(浪速生野病院心身医療科部長)、尾崎紀夫さん(名古屋大学精神医学・親と子どもの心療学分野教授)、座長：前田潔さん(神戸学院大学総合リハビリテーション学部教授) ●**問い合わせ**／兵庫県いのち対策室　TEL078(362)3060
第59回兵庫県人権教育研究大会中央大会	●**日時**／9月29日(土)10:00～16:40、30日(日)9:00～15:30　※要申し込み、有料 ●**場所**／兵庫県立大学附属高等学校・中学校　※JR「相生」「上郡」「播磨新宮」「姫路」の各駅から神姫バスで播磨科学公園都市行き「県立大附属高校前」下車すぐ、または播磨自動車道播磨新宮ICから約5分 ●**テーマ**／「差別の現実から深く学び、生活を高め、未来を保障する教育を確立しよう」 ●**内容**／29日：全体会、分科会、特別報告「ちょっと考えてみませんか」(ライフデザインいぼがわ) 30日：分科会、アトラクション「皮革ファッションショー」(県立龍野北高等学校生徒)、記念講演「複合差別と人権～韓国ドラマを通して考える～」山下英愛さん(立命館大学非常勤講師) ●**問い合わせ**／兵庫県人権教育研究協議会　TEL078(271)8189
電話相談 全国一斉「高齢者・障害者の人権あんしん相談」強化週間	●**日時**／9月10日(月)～14日(金)8:30～19:00、15日(土)・16日(日)10:00～17:00 ●**内容**／高齢者や障害者をめぐるさまざまな人権問題(暴行・虐待など)の相談に法務局職員や人権擁護委員が応じます ●**問い合わせ**／神戸地方法務局(常設電話相談)　TEL0570(003)110

ハーフタイム

最近、書店でよく目にするのが、高齢の方が人生を振り返り、自分自身の生き方をつづった本。「きずなライブラリー」で取り上げた橋本武さんの著書もそうです。その人が今までどんな道のりを歩み、何を成したのか、全ての歩みに輝きと重みがあります。今月号では、高齢者の虐待や孤立の防止を中心に紹介しましたが、甲南女子大学の臼井教授の「人それぞれが歩んできた人生や環境を大切にし、尊厳を重んじることを忘れないようにすることが大切」という言葉は、虐待防止に向けて、私たちが心に刻んでおかなければならないことだと思います。(田中)

(公財)兵庫県人権啓発協会　〒650-0003　神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360　info@hyogo-jinken.or.jp

兵庫県人権啓発協会　検索

2012(平成24)年9月発行